

## 外国語授業におけるメール連絡網の活用 —連絡の改善から授業の改善へ—

小樽商科大学 言語センター教授 大塚 譲(ドイツ語教育専攻)

- 0 はじめに
- 1. 立ち上げとメンテナンス
- 2. 日常連絡
  - 2. 1. 授業予告・準備
  - 2. 2. 授業補足
  - 2. 3. 緊急連絡
- 3. 試験関連
  - 3. 1. 態勢作り
  - 3. 2. 試験結果通知(解答・データ・講評・評価)
- 4. 休暇と学期を接合するメール連絡網
  - 4. 1. 夏休みの課題と後期中間口頭試験
  - 4. 2. 冬休みの課題と後期末口頭試験
- 5. 効果—結びに代えて
  - 5. 1. 学力増進と脱落防止
  - 5. 2. 作文教育の可能性

### 0 はじめに

本稿は、主として2005年度ほぼ1年間のドイツ語Ⅰ-4クラスのドイツ語授業<sup>1</sup>においてメール<sup>2</sup>連絡網<sup>3</sup>がどのように活用され、またそれはどのような効果を挙げているかについて論ずるものである。しかし私は2002年度以来部分的に、2003年度からは担当の全クラスにおいてメール連絡網を活用しているので、本年度のドイツ語Ⅰ-4以外での経験・認識を援用して論ずる場合もある。

本学の現行カリキュラムにおいて外国語科目群は必修部分と研究指導を含む選択部分との融合に一大特徴を有するが、初習外国語のⅠの必修部分を以前のように週3回の学習を可能にすれば、文字通り北の外国語大学へ向けて大きく一步を踏み出すことになる。

外国語科目の必修部分について言えば、履修した2外国語について、Ⅰで週2回4単位を修得、Ⅱで当該2外国語の内ひとつを週2回4単位、もうひとつを週1回2単位を修得すべきこととなっている。ドイツ語についても、Ⅱ(2年目)で週2回と週1回の2コースに分かれる関係で、Ⅰ(1年目)で一通りの基礎知識は獲得しておくべき体制になっていると考えられる。

週3回の学習時間があれば初習外国語でも言語の構造とコミュニケーションの基礎を統合的に学習させることができるであろう。週2回の学習時間では言語の構造的基礎の理解に重点を置かざるを得ず、コミュニケーション能力の習得は形ばかりのものに留まらざるを得ない。私がメール連絡網を活用しようとするのも、ひとつにはコミュニケーション能力習得の方向でいくばくかでも時間を増やしたいと願うからである。

ここで対象とするドイツ語 I-4なるクラスを、私は今年度週2度とも担当し一貫した方針で教えることが許されるという幸運に恵まれた。目標はドリル多用による基礎文法の徹底学習とコミュニケーション能力獲得につながる若干の自己表現の鍛錬にある。

## 1. 立ち上げとメンテナンス

メール連絡網の立ち上げ方法は至って単純なものである。最初の授業で一斉に私のパソコンのメールアドレスへ①氏名②学生番号③携帯アドレス④携帯番号⑤メールアドレスを送信してもらう<sup>4</sup>。大切なのはアドレスが変わった時には即座に連絡してもらうことである。しかしこれまでの経験では、学生は、メールでのやり取りが定着してくれば、リストに自分のアドレスが登録されていないと困ることが分かってくるので、自分の方から知らせしてくる。また携帯アドレスのみならず PC アドレスを把握しておくことは、後々の添付ファイルを活用した添削による作文教育につながるので極めて重要である。本学の情報処理センターには全学生がパソコンを利用できる環境が整っており、PC アドレスの保有を前提とした外国語教育は十分可能と考えられる。併せて基礎的な IT 教育にもなるだろう。

## 2. 日常連絡

### 2. 1. 授業予告・準備

日常的には、メール連絡網<sup>4</sup>はとりわけ教師から学生への授業予告や授業準備にかかわる連絡に用いることができる。特に次回に重要項目を扱う場合であるとか、辞書の持参を要する場合などに前日に改めて連絡しておくのは効果的である。また例えば次回に口頭試験のためのグループワークなどをする場合、一人でも欠ければグループも本人も後から困ったことになるのは目に見えているので、メールで改めてこの件について念を押し注意を喚起しておくことは重要である。こちらも教室での事前の指示・連絡が不十分のこともあるし、学生の側でも聞き漏らしたり取り違えたりする者もありうるので、連絡は馬鹿丁寧くらいの方がよいと思っている。

また予習のサポートのために連絡する場合もある。例えば語彙解説。初習外国語では、「読章」や語彙が難しい「練習問題」については、プリントやメールで語彙解説を与えておくのが効果的である。特に初級教材では、学生は語彙さえ分かれば大抵のテキストの内容は即座に理解する。(辞書の引き方の訓練は英語で十分身に着いているはずだ。)辞書を引き引き長時間をかけて読み解いてみたら分かりきった内容だったというのでは学習動機に水を差すことにもなる。語彙解説を与えてどんどん読み進んだ方がよい場合も少なくない。むしろその分の時間でもう一つ別のテキストを読んだり、応用問題を手厚くする方がはるかに習得は進むはずである。

また学生からも随時授業内容についての質問、授業予定や宿題の提出期限などについての問い合わせ、新しいアドレスや携帯番号の連絡等が寄せられる。いずれにしろ細やかな連絡態勢は、信頼感を増進し、結局は授業の効率化・快調な進捗にもつながってくると思われる。

## 2. 2. 授業補足

例えば「3・4 格支配の前置詞」をはじめとする難しい文法事項については、授業時での学習を補う意味で、メールによって補足説明し類例を示し追加問題を送るのも効果的である。因みに追加問題について言えば、一定の日時まで自習しておくことを求め、その日時に解答を送り自己添削を求めるやり方もなかなか有効である。しかし追加問題のメールによる処理法は、いつでもこの自己採点方式がよいわけではない。作文的課題の場合にはく学生から教師への答案送付→教師から学生への答案添削・返送方式の方が学生としてはやりがいを感じるだろうし、教師としても正確を期すことができる。課題の性質に応じて方法を使い分ける必要があるだろう。

## 2. 3. 緊急連絡

メールは緊急の連絡に適している。学生からのものとしては、まず欠席通知が挙げられる。教務係を通しての公式の欠席届以前に、つまり授業の前日か当日の朝、理由を添えて欠席する旨の連絡がある。病気、近親者の不幸、寝坊、JRの遅れなどおおむね正直な理由が挙げられているように思われる。最近のこと、始業時間近くに普段は無遅刻・無欠席の学生から雪害によるJRの遅れで15分遅刻する旨の知らせがあった(私の携帯アドレスも教えてある)。15分待ち、札幌からの通学生が到着し、なお2名の不在者は小樽在住者であることを確認して、授業を開始した。

## 3. 試験関連

### 3. 1. 態勢作り

●試験範囲の連絡: 試験の実施に当たっては事前に範囲を正確に確定・確認することが重要である。特に外国語科目については、よい授業をしようと思えば、教科書の一部を飛ばしたり付属の練習教材の一部を扱ったりまたこれら以外の教師自らが用意した教材を重点的に扱うなど、使用教材が多岐にわたることも珍しくない。(海外の教科書を使用している場合は事態はこの比ではなく、教科書が4点セットや5点セットの教材群(教科書本体、ワークブック、ドリル教材、補足教材付き教師用指導書、CD)から成るのはごく普通のことである。)従ってどの教材のどこを試験範囲とするかを明確にしておくことは、試験を作成する教師の側にとっても、試験前に学習事項のおさらいをする側の学生にとっても、きわめて重要である。メール連絡網を使えば、授業を休んだ者を含めて全員に正確な文字情報を伝えることができる。

●グループ編成: 口頭試験ではグループで何らかのプレゼンテーションを行うことが多いが、グループ編成にあたってメール連絡網は威力を発揮する。グループ編成法としては、第一に教師が一方的にグループを編成する「指定グループ方式」がある。教師はメンバーの組み合わせや他のグループとのバランスを良く考えてグループを編成しそれを全員にメールで連絡すればよい。第二に学生みずから編成する「自主グループ方式」が挙げられる。この場合にも学生は編成結果を教師に連絡するだけでよく、仮に1名足りなければ、その選択補充を教師に委ねればよい。いずれにしろ教師は全クラスにグループ構成とそのメンバーを一斉メールで通知し、また個々のグループに対しては構成メンバーの連絡先を周知すれば、それぞれのグループ内で事前に必要な連絡を取り合うことも出来るし、また授業時にいきなりグループワークに取り掛かることもできる<sup>5</sup>。

### 3. 3. 試験結果通知(解答・データ・講評・評価)

定期試験の結果について学生に詳しいデータを与えることは、彼らが自らの学習を方向付ける上でもきわめて重要である。本年夏にも、8月中旬～9月初旬に、ドイツ語 I - 4とII A2のクラス全員に前期定期試験結果の詳しいデータを送った。まず全員に一斉メールでクラス全体のデータを送った上で、個人宛メールで個別データを送った。全員への一斉メールでは、期末試験について①筆記試験データ(平均点・最高点)②口頭試験データ(平均点・最高点)③①と②の総合成績(平均点・最高点)④講評(特に筆記試験の各問の狙い、クラスの結果や問題点についてやや詳しく分析している)の順で説明している<sup>6</sup>。その後の個人宛メール<sup>7</sup>では、個人のデータをクラス全体のそれと対比する形で示し、それぞれの成果と問題点を今後の学習法も含めて分析的に説明している。後期の授業開始日に答案は返却された。そして学生たちはメールで示された自分自身の課題を確認しながら間違った箇所を自ら訂正して教師に再提出してチェックを受けた。

#### 4. 休暇と学期を接合するメール連絡網

##### 4. 1. 夏休みの課題と後期中間口頭試験

ここで本年度のドイツ語 I - 4の年間試験方針について一言すれば、まず教科書(文法項目と練習問題、冒頭のダイアログ問題、読章、ドイツの生活文化情報から成る)について年に4回の筆記試験を行う。前期に2回(2回目は前期末試験)、後期に2回(2回目が期末試験)行うが、1回分がほぼ教科書の4分の1ほどの分量になる。期末試験には筆記試験とは別の日に口頭試験を行う。前期末の口頭試験は、急に指名された者同士がペアとして所定の資料に基づいて Dialog を演じる、という内容であった。授業では、その準備として44の基本的な個人情報<sup>8</sup>をめぐる問答を何回か最寄の者同士で練習した。後期末の口頭試験については4. 2. で詳述するが、年末年始の出来事や後期試験後の予定などを話し合うスケッチをグループ毎に演じることになる。

本年度は、後期中間試験(11月末実施)に新しいことを試みた。すなわち、例年のように10—11月の学習分に対応する筆記試験としてではなく、自己表現にかかわるかなり大きな口頭試験を行ったのである。この自己表現は三つの柱から成っている。①基本的な自己紹介②現在完了による自己表現1: 週末報告③現在完了による自己表現2: 夏休みの報告。②については、例年の経験から言って、後期(10月初旬)に現在完了(ドイツ語の日常語では、過去の事柄はふつう現在完了形で表現する)を学んだ際に毎回の小課題として各自の週末の出来事を口頭で報告させ、併せて提出される文を添削・返却すれば3週間程度で簡単な週末報告は楽に出来るようになるので、口頭試験の一つの柱に十分なりうる。①については、上記の前期末の口頭試験の素材となった44の基本的な個人情報から20文程度の自己紹介テキストを作ることは造作も無いことであるから、忘れないうちに夏休みの課題として集約させておくこととした。③はやはり夏休みの課題として当面現在時制で4日分を報告させることにした。

ここら辺からはメール連絡網に全面的に依存することになる。私は8月初旬に、このような主旨の夏休みの課題をクラス全体へ一斉メールで連絡した。①も③もできるかぎり添付ファイルで提出させ、色字で添削の上ただちに返送する。③は1日分は3つの文から成ることとし、1文は半角60字とした。メールの到着を分散させるために、学生は8月9月の各自の誕生日(例えば4月20日生まれは8月20日と9月20日)に2日分ずつ(つまり6文ずつ)添付ファイルで私宛てに送付すべきこととした。そしてそのどちらかの機会に①の自己紹介テキストも一緒に送付し添削を受けることとした。

ドイツ語 I - 4クラス全員の分の生活報告文と自己紹介テキストを総計すると1152文になる。自己紹

介の方は単純な表現だが、生活報告の方は初習者ながら自己表現であるから内容は千差万別であり、1日3文とはいえ1文の長さがまちまちであっさりとした短いものもあれば表現意欲に富む長めのものもある。学生が知らない単語・表現をこちらに尋ねてくるのも止むを得ない。2, 3度やり取りしてやっと出来上がる場合もないわけではない。添削の際大切なことは、学生たちのドイツ文の下にいちいち日本語訳を付けさせることである。こうしておけば学生たちの表現意図が分かるので、添削・修正が随分し易くなる。これは表現意図と表現能力との間のギャップが大きい場合には有効な方法のように思われる。

もちろん全く速やかに全員の分が届いた、というわけではない。時機を計ってすでに提出した者の氏名を列記した簡単な提出状況報告の一斉メールを2度(9月初めと9月末)流して注意を喚起しかつプレッシャーを掛けた。事実これがきっかけとなって出しそびれていた学生たちから一度にどっとメールが届いた。9月末の2度目の提出状況報告メールの際には、同時に少数の未提出者に対して個別メールを送り提出を促した。残念ながら結局2名の者が提出せず、全員分の提出完了は学期開始後にずれ込んだ。

次の作業は、現在時制で書かれた各自の12個の夏休みの報告文を、現在完了時制で書き換えることである。10月第3週に学生たちは現在完了時制を学び、早速手書きの宿題として12個の文を現在完了時制に書き換えて提出した。今回はほとんど遅れる者は無かった。私の方も夏休みに手間隙をかけて添削してからあまり日が経っていないので、今回は実にスピーディーに添削し返却できた。学生たちが躓いたのが複合動詞の過去分詞の形、完了の助動詞のseinとhabenの取り違え、および過去分詞の位置に関するものに集中していたこともあるが。しかし作業をこの添削・返却のところで終わらせなかった。添削・修正版をワードで清書し添付ファイルで送付することを求めたのである。今ではこの執拗な提出要求には意味があったと思っている。第1にこのように丁寧な修正作業を行っても、手書きの添削や思い違いなどのせいでなお小さな誤りが散見されたからである。第2に口頭試験の際、私がプリントされたテキストを片手にチェックしたり、言いよんだ者に助け舟を出したりすることができたからである。第3に学生たちの自己表現の記録が正確に保存できたからである。

これで口頭試験の三つの柱の内の二つ、①と③の用意は整ってきた。ではもう一つの柱②の方はどうなっていたらうか？記録によると11月1日(火)に授業冒頭での週末報告の練習を開始し、12月15日(木)まで続けている。この練習のやり方はごく簡単なものだ。毎回授業冒頭に10人くらいの学生に「週末に何をしたか？」を尋ね「土曜日には～した。」「日曜日には～した。」の形で答えさせる。記入用のフォーマットが渡されていて、火曜日はちらちら程度なら文字を見てもよいが、木曜日には全く見ないで答えなければならず、また木曜日にはフォーマットを提出し火曜日には添削の上返却される。またなるべく2回続けて同じことを言わない(例えば「バイトをした」の類)。また文を少しずつ拡張してもよい。例えば「土曜日には札幌へ行ってコートを買った、寒くなったので。」と言った具合にである。いずれにしろ口頭試験当日は、学生たちはすでに4回の週末報告の経験をしていたので簡単ながらある程度の自己表現はできた。

かくして11月末の口頭試験では、学生たちは①自己紹介(簡単な20の文による)②週末(土・日)の出来事の報告③2日分の夏休みの生活報告(4日分は少し多すぎるので半分に減らした)を5分以内で何も見ずに話した。何とか36名全員がこの課題を出来不出来の違いはあるもののやり遂げた。一人一人のパフォーマンスはビデオに撮影し正確な評価を行った。

いずれにしても上記口頭試験の課題①と課題③はメールによる指示やメールでのやり取り(「添削修

正法)を抜きには決して実現できなかったことは明らかである。

課題①では、前期口頭試験のための練習素材をメールを介した「添削修正法」で集約することによりコミュニケーションの基本中の基本である「自己紹介」の基礎を固めることができた。また課題③では、休み中にメールを介したややハードな「添削修正法」によって現在時制ながら生活報告の正確な自己表現を作成しておいたからこそ、その後の授業での現在完了の学習を踏まえて、やはりメールを介して一段深化した自己表現に到達することができたのである。休み中の報告文の作成の際にはそれなりに骨を折ったかに見えて学生たちも、語彙・表現が固まってしまえばこれを現在完了に書き換えるのにさほど大きな苦勞をしなかったらしいことは、その速やかで遅れの無い提出振りによく現れていたように思われる。

#### 4. 2. 冬休みの課題と後期末口頭試験

冬休み明けには、第3回目の筆記試験を行ったほか、学生には、冬休みの宿題の提出を求めた。この宿題は期末試験の口頭試験の準備の一環となるように仕組みられている。冬休みの宿題とは、年末年始の1週間に何をしたかを与えられたフォーマットに書いて報告するのである。報告に必要なと思われる語彙・例文等の資料は冬休みが始まるだいぶ前に配布し説明している。日本の年末年始に付き物の物の名前や行事の名称等々、また遊びにまつわる語彙(お餅、年越しそば、大掃除、年賀状、初詣、お年玉等々の語彙、またスキーを滑る、スノーボードを滑る、飲みに行く、カードゲームをする、カラオケに行く等々)である。冬休みが始まる前に、これらの語彙と zu 不定句を組み合わせて冬休みの予定を書かせる課題を提出させ添削・返却してもいるので、ささやかな使用経験を通して語彙の理解もそれなりに進んでいたはずである。案の定、提出されたものを添削・修正したところでは、多くの者が現在完了による報告文にかなり慣れてきたこと、そしてある程度は楽しんでやって来たことが見て取れた。

ところでこの原稿を書いている現在の日付は、2006年1月23日。原稿提出の遅れによって逆にもう2週間で学期終了の時期に差し掛かり、ほぼ後期全体の経過を踏まえて書けることとなった。とは言え、ここ数年来、冬休みの課題を後期末の口頭試験に結び付けているので、年によってそれほど大きな相違は無い。休み明け早々に全員の課題が提出されたので、まずこれを添削し返却する作業に着手した。

いずれにしろここでも冬休みの課題から口頭試験へは一連の学習過程を成し、その間メール連絡網はやはり不可欠の介添え役を果たすことになる。まず私が総合判断して9つの4人グループを編成してこれを全員に連絡しておく。同時に個々のグループについても連絡網を作り、メンバー全員の連絡先を知らせると同時に代表(活発でコンピューターの得意な学生)を決めておく。今後の授業時のグループワークによってスケッチの台本を作成してもらおう。スケッチは①年末年始におこなったこと各人2件(現在完了で表現。表現が重ならないようにグループ内で調整)②先週末の土曜・日曜におこなったこと(現在完了で表現)③試験後の予定(現在時制+ zu 不定句使用)、という三つのテーマについて4人のメンバーが均等に発言する機会を持つものであるべきである。そして代表と私とのメールのやり取りで程なく完成版の台本が出来上がるであろう。この台本は、授業補助のネイティブ学生が私かによってテープやCDに吹き込まれ、それに基づいて各グループのパフォーマンスの練習が重ねられるであろう。

いずれにしても、従たる役割とはいえ、メール連絡網無しにはこの刺激的な学習過程は全く成り立たないと言っても過言ではない。

## 5. 効果—結びに代えて

### 5. 1. 学力増進と脱落防止

以上見てきたように、メール連絡網は基本的には実務連絡や学習補完といった補助的機能を果たすものである。それはたしかに教育そのものにとって代わる(例えばそれ自体ひとつの教育課程を成す e-learning を実現する)ことはできないが、これによって教育本体が飛躍的に改善されることもまた明らかであろう。それはひとえに(携帯メールを含めた)電子メールという文字媒体による直接コミュニケーションを可能にするメディアの働きに負っている。電子メールは即時・確実・直接に学生に連絡事項を伝達してくれるからである。

この優れた情報伝達力によって、メール連絡網は学生の学習意欲を高め、また学習意欲を回復させることで脱落を防止する効果がある。すなわちそれは、一方では動機の強いものには更なる学習機会を用意することができる。他方ではそれは授業参加姿勢が消極的な者や動機を(見)失いかけている者には、(携帯)電話等も動員して初心を思い起こさせ出席を促すことができる。メール連絡網は、重要な提出物の提出が遅れている者に対して個人的に直接督促することができる。私は1年生の授業ではほぼ毎回「今日の授業」なる授業プログラムと資料と記入欄と追加応用練習問題とが一体となったプリントを配布しており、また欠席者用のボックスを言語センターに設置して欠席した者が早目にこのプリントを持参して遅れを挽回しやすい態勢を採っているが、特に重要な授業の場合にはこの教材を欠席者本人に直接添付ファイルで送る場合もある。何度も連続して欠席したり口頭試験のグループワークの際に欠席するなど、脱落しやすいケースでは直接電話で話して出席を促すこともある。授業から足の遠のき始めた者を呼び戻しながら、クラスの進度も落とさないことが大切である。こうした者をあっさり切り捨てることも、あるいは安易に容認することでクラス全体の授業の進行や熱い雰囲気にも水を差すのも、両方とも感心しない。こうした者に苦しみながら理解を挽回させることが「自己責任を取らせること」であって、排除し挽回のチャンスを奪うことが自己責任を取らせることではない。「苦しみながら理解を挽回する」ことが自己責任を取ることであり、この挽回を支えることも教師の仕事ではなからうか？

### 5. 2. 作文教育の可能性

メール連絡網は「作文教育」の点に関してはほんの一部ながら教育本体にもなりうる。正確に言うと、休暇中の生活報告をめぐる作文課題は容易に教育本体に変換・接合しうる。元来電子メールは文字媒体なので作文教育に適する。とりわけ学生側が添付ファイルが出来れば、色文字や取り消し線を使った添削法によってかなり正確な訂正を行うことが出来る。これに加えて添削結果を踏まえた清書の提出により最終確認を行うようにすれば、ほぼ万全の作文指導が可能となる。

作文機会は実に多様である。私の今年度の教育実践に即して言っても、ドイツ語 I ではこれまで見てきたように、2種の夏休みの課題(「自己紹介テキストの作成」と「夏休みの4日分の生活報告」→「後期中間口頭試験」に接合)、冬休みの課題(「年末年始の1週間の出来事の報告」→「後期末口頭試験用の台詞の共同制作」に接合)に取り組んだ。因みにドイツ語 II では①「教師宛暑中見舞いメール」②ペアワークでインターネットで調べながら「仮想ドイツ旅行計画について手紙に書く」(主に現在時制)③「仮想ドイツ旅行の結果を手紙に書く」(主として現在完了時制)④オーストリア・ドイツ語検定(基礎級)の準備教材を使って、指定された状況設定の手紙を書く練習(1)⑤④と同趣向の書く練習(2)⑥冬休みの課題「ドイツの料理かお菓子をレシピに倣って実際に作り、そのプロセスを簡単なドイツ語で記述し、証拠資料として出来上がった料理かお菓子の画像を送る」「料理の不得手な者は代替課題とし

てドイツ語による小スケッチ(指定の状況設定による)を提出」という具合にかなりの量をこなした。IでもIIでも、提出方法はほぼ常にメールにファイルを添付するやり方である。

以上、メール連絡網の活用によって授業を改善するひとつの試みをご覧に入れた。今後ともこの方法による実践を重ねながら効果や問題点の検証を続けることが必要であろう。今後の課題としては、ひとつには言語習得の観点から「書く」ことから「話す」ことへの技能的展開の可能性についての検討が挙げられる。今ひとつには、メール連絡網に支えられて、確かに事はいつでも整然と進行して行くが、それが学生の自発性とどうつながっているのか、という不安、指示をしすぎて自発性の芽を摘んでいるのではないか、という不安の問題である。

### 【注】

#### 1.

正確に言うと入学式後の4月の授業開始から本稿の締め切りの2006年の1月半ば、せいぜい後期定期試験直前までのほぼ2学期間である。本年度ドイツ語I-4のプロフィールと授業計画は以下の通りである。

#### 《プロフィール》

[名称] ドイツ語 I-4

[クラスの種類] 非選択クラス [選択クラスと非選択クラスの別がある。全4クラスの内1クラスのみが志望者から成る選択クラスでネイティブと日本人が教え、学習動機が強い者が集まるやや少人数のクラスで名称はドイツ語 I-1。他の3クラスは非選択クラスで学生番号順の自動編成クラス。2回とも日本人が教え、定員は38名ほど。通常、学習動機はあまり強くない。]

[人数] 36名・内女子13名(最初は38名だったが2名脱落。1人は前期試験前再三の働きかけにもかかわらず脱落。もう一人は夏休み後来なくなった。連絡にも応答無し。金沢出身で北海道にうまく適応できなかったのか、他大学受験か。また女子の内1名は科目等履習生の中国人女性である。)

[4月～12月までの50回の授業の平均出席率94%、皆勤者数12名]

#### 《授業計画》

[目標] ドリル多用による基礎文法の徹底学習とコミュニケーション能力獲得につながる若干の自己表現の鍛錬。

[授業回数] 60回\*火曜・木曜とも大塚が担当[教科書] StraBe(全109頁,朝日出版)を最後まで。

[教材] 毎回平均2~3枚を作成・配布

[試験] 筆記試験年間4回/口頭試験年間3回/動詞小テスト3回

#### 《工夫》

- ・ 学生の名前を覚えることによる出欠チェックの不要化
- ・ メール連絡網による授業の合理化・効率化



2.

e-mail は外国語教育の文脈では「インターネットのメール機能を利用した、現代版 Pen-Pal」  
として E-Mail-Pal ないしは e-Pal と呼ばれて、活用されているようである[吉島茂・境一美著  
「ドイツ語教授法科学的基盤作りと実践に向けての課題」(2003 年, 三修社 217-218 ページ)  
/ Karl-Richard Bausch, Herbert Christ / Hans-Jürgen Krumm(Hrsg. ) Handbuch  
Fremdsprachenunterricht 2003 A.Franke Verlag Tübingen und Basel S.269-272)。しかし  
本学ドイツ語 I のカリキュラムでは、初級文法全体の習得が主課題となるので、メールを利用  
した「コミュニケーション練習」自体は行われぬ。ただ一部「作文教育」に活用され、それ  
がさらに口頭試験に結び付けられる限りでコミュニケーション能力にも若干つながりはするが、  
いすれにしてもほんの部分的である。ただし II になると、「はがきや手紙を書く」という形でか  
なりの程度コミュニケーションの練習に結びついてくる(詳しくは本文 9 ページを参照。)

3.

私の用いるメールによる連絡体制を「メール連絡網」と名づけておく。私はクラスのメンバ  
ー全員のアドレス(携帯, 自宅の PC, 学内の情報処理センターのアドレス)のリストを作り、こ  
れによって一斉に連絡することができるし、また個々の学生に連絡することもでき、更には例  
えば口頭試験などのためにクラスをいくつかのグループに分ける場合にはただちにグループ毎  
のメール連絡網を作ることができる。学生は私に質問等がある場合はいつでも連絡することが  
できる。しかし学生同士が自動的に連絡を取り合ったり意見交換を行うことは予定していない。  
従って、討論可能な双方向的なコミュニケーションシステムであるいわゆるメーリングリスト  
とは根本的に異なる。またメールマガジンとは一方的伝達を行う点では似ているが、受け手(学  
生)が発信者(私)とやり取りできる点は異なる。ともかく私が活用する「メール連絡網」なる  
連絡体制は、名づけるのも憚られるような単純素朴な仕組みである。

確かにホームページを訪問してもらいやり方もあろう。しかし「メール連絡網」方式にはこ  
ちらから学習者に接近し必要事項を必ず伝達できるという「連絡漏れの無さ」に特徴がある。  
学生の大半が、携帯, 自宅パソコン, 大学情報処理センターのいずれにも(少なくとも二つには)  
電子メールアドレスを持っていると見て間違いのない現状を踏まえるならば、このスマートでは  
ないやり方にも有意性はある。

またこの「メール連絡網」方式はゼミなどの少人数クラスの場合には短時間で態勢を作ること  
ができるのでまことに便利であり、すでに大分前から活用されていることだろう。

携帯メールの字数制限について一言。一昨年くらい前までは、多くの学生が利用するドコモ  
に半角 500 字(全角 250 字)の字数制限があり、一つの用件のために、場合によっては 2~3 の  
メールに分割して送ることもあったが、今はどの社の携帯も受信については設定の上全角 2000  
字までの文字数が許容されるようになった。

4.

その際、教師は自分のパソコンのメールソフトにあらかじめ当該クラス用のフォルダを作っ  
ておき、送付の際学生に件名欄にクラス名を書いてもらえば、全てのメールを自動的にクラス  
専用のフォルダへ集めることができる。しかしその後の個々のデータを整理し一つのグループ

にまとめる作業は手作業とならざるをえない。

5.

浅野誠著「授業の技一挙公開—大学生生き残りを突破する授業作り」(2002年 大槻書店) 104—127 ページ

6.

参考までに前期定期試験結果に関してクラス全員に送った『全体講評』の一例をお示ししよう。2005年度ドイツ語Ⅰ—Ⅳクラスに8月11日に送った前期定期試験(8月2日実施)に対する『全体講評』である。

『全体講評』

《1》筆記試験の重点の確認\*重点事項の後の[S. . .]は教科書頁数

【Ⅰ】文法問題 1)2)時刻[S. 34]3)手ごわい疑問詞 was fuer\*ein(+語尾)[S. 36]4)5)6)7)人称代名詞 3格/所有冠詞 3格[S. 37-39]8)2格[S. 41]9)3格 4格同居の場合[S. 41]10)11)12)3格支配の前置詞/4格支配の前置詞[S. 45]13)3・4格支配の前置詞[S. 46]14)前置詞と定冠詞との融合形[S. 46]15)一定の前置詞を伴う動詞[S. 47]※メールではドイツ文字は ä=ae, ö=oe, ü=ue, ß=ss とつづる。

【Ⅱ】総合コミュニケーション問題：①各種の決まった言い回し②使用頻度の高い各種語彙の反復・定着

【Ⅲ】書き取り問題：語順と文構造の確認が狙い

《2》総評

格の区別が出来ず多くの人が苦しんだ。特に格を示す冠詞類(種類も結構ある)の形が名詞の性によって多少異なることに躓いた。人称代名詞も格によって形が変わる。おまけに所有冠詞と人称代名詞には同じ形のものもある(最も紛らわしい例 . . . . . ihr=君たちは[人称代名詞 2人称複数 1格]/ihr=彼女に[人称代名詞 3人称 sie の 3格]/ihr=彼女の・彼らの[所有冠詞。これに語尾が着く])。だがドイツ語は入り口が大変でそれを過ぎると比較的楽な言語 . . . . . 中略 . . . . . 最初苦しいのは当然。集中して苦しむことが肝要。

今回の出題箇所は「格」が勢ぞろいし格の理解が最大のテーマ。これまで学んだ事項があいまいだと「格の全面展開」で混乱に陥る恐れがある。これまできちんと理解・定着が出来る人は、この難所もよく凌ぐことができた。レンガで家を造っていると思ってください。ここを集中的に習得して欲しい。でないと「格が分からないと前置詞が分からない」→「前置詞が分からないと動詞が分からない」という風に借金が増えて行きます。不安定な脆い家しか出来ません。しかし一端出来上がると後は楽です。永く快適に暮らせる家が出来ます。

筆記の当初の平均は53点(89点2名)。難易度を考慮し一律10点プラス。筆記60%, 口頭40%で100点満点化[平均67点, 最高95点2名, 優(80以上)7人, 良6人, 可12人, 不可10人]。口頭は極めて重要な試験だがアバウトの面が避けられない。しかし筆記の基準の冷たさを人間的に緩和するやさしさがあがり、あまり安心してもらっても困るが卑下する必要も無い。《個別評価》では①最終評点(+口頭と筆記の内訳)②筆記の素点③「課題の所在」を指摘します。今後の学習の手がかりにして下さい。なお復習の際は教科書+追加教材でお願いします。

◎評点と共に試験問題ごとに3段階評価(1=理解・習得が進んでいない, しっかりした対処を要す, 2=ある程度理解・習得が進んでいるが再学習するのがベスト, 3=よく理解・習得がすすんでいる)をしますので, これを参考に, 手遅れにならないうちにしっかり対処してください。以上です。大塚 ※もちろん10月になったら答案を返却しますので, また添削のやり取り\*をします。

\*返却された答案の間違った箇所は【?印】が付いているだけで訂正されていない。各自が色字ボールペンで訂正して再提出する。完全に訂正されるまでやり取りは続く。

7.

注6. のような『全体講評』を一斉メールで送った後, 個々の学生に個別評価を送るがその内の2例を示す。なお, 評価項目①~③の内容を再度示すと以下の通りである:

①最終評点(+口頭と筆記の内訳)

②筆記の素点

③「課題の所在」

※評点と共に試験問題ごとに太字で3段階評価(1=理解・習得が進んでいない, しっかりした対処を要す, 2=ある程度理解・習得が進んでいるが再学習するのがベスト, 3=よく理解・習得がすすんでいる)を示している。

(例1)

YY YYY さん ①最終評点94点(筆記:60点, 口頭:34点) ②筆記の素点:141/158点 ③課題の所在:

【I】文法問題:1)2)3 3)3 4)5)6)7)3 8)3 9)3 10)11)12)3 13)3 14)3  
15)3 【II】総合コミュ:3 【III】書き取り:3

【講評】勉強の成果がよく現れています。この調子で夏休みの課題にも取り組んでください。

(例2)

XX XX 君 ①最終評点35点(筆記:15点, 口頭:20点) ②筆記の素点:23点/158点 ③「課題の所在」

【I】文法問題:1)2)1 3)1 4)5)6)7)1 8)2 9)1 10)11)12)3 13)1 14)3  
15)1

【II】総合コミュ:1 【III】書き取り:1

【講評】きわめて勉強不足です。夏休み中少しよく復習してください。また出されている課題にまじめに取り組んでみてください。かならず授業に出席することが最も大切です。このことだけはかならず守ってください。大塚

8.

44の問答の素材とは以下の通り。授業ではドイツ語で最寄りの者同士で何度も練習し, 試験では急に指定されたパートナーとチェックの付いた事項(日本語)について5分間以内で相互インタビューする。インタビューの様子はビデオで撮影し正確に評価する。

1.姓 2.名前 3.居所 4.学生番号 5.趣味 6.好きな食べ物 7.好きな飲み物 8.好きな科目  
9.兄弟いる? 10.何人? 11.父親の名前 12.母親の名前 13.父親の年齢 14.母親の年齢

15.兄弟姉妹の職業身分 16.父親の職業 17.母親の職業 18.持ち物評価  
19.クリスマスプレゼント 20.誕生日プレゼント 21.夏休みの計画 22.希望の専攻 23.第2外国語・西語？／中国語？ 24.あしたひま？ 25.母親・旅行好き？ 26.小樽好き？ 27.札幌好き？ 28.好きなスポーツ 29.好きな楽器 30.ドイツ語好き？ 31.英語好き？ 32.喫茶店で・何にする？→紅茶とフルーツケーキ→何にする？→コーヒーとチーズケーキ 33.計算問題・45+38／87-42 34.昼食 35.靴の値段 36.ズボン／スカートの値段 37.かばん／バックの値段 38.辞書の値段 39.朝の交通手段の発時間 40.朝の大学への着時間 41.大学を出る時間 42.家に帰り着く時間 43.誰のもの？ 44.利用している乗り物 45.お礼→どういたしまして／こちらこそありがとう

9.

ドイツ語Ⅱにおける作文のさまざまな試みについては他日を期す。

#### 《参考文献》

1. 吉島茂／境一三著「ドイツ語教授法—科学的基盤作りと実戦に向けての課題」(三修社2003年)
2. Karl-Richard Bausch, Herbert Christ / Hans-Jürgen Krumm(Hrsg. ): Handbuch Fremdsprachenunterricht 2003 A.Franke Verlag Tübingen und Basel
3. 平高史也・古石篤子・山本純一著「慶応SFCの現場から外国語教育のリ・デザイン」(慶應義塾大学出版会2005年)
4. Kジョンソン・Hジョンソン編／岡秀夫監訳「外国語教育学大辞典」(大修館書店1999年)
5. 村上龍著「eメールの達人になる」(集英社新書2001年)
6. 山地弘起・佐賀啓男編「高等教育とIT」(玉川大学出版部2003年)
7. 浅野誠著「授業のワザ一挙公開—大学生生き残りを突破する授業作り」(大月書店2002年)